

海邦養秀ネットワーク構築事業実行委員会

沖縄県文化観光スポーツ部交流推進課

ペルーの「家族」 に会いに行こう!

平成28年度海邦養秀ネットワーク構築事業

報告書



事業委託: (株) 国際旅行社 (特活) 沖縄NGOセンター

はじめに

はいさい、ぐすーよー ちゅーうがなびら。

沖縄県民の海外移住は1899年のハワイ移民に始まり、20世紀には多くのウチナーンチュが新天地を求めて海を渡りました。今日では世界各地に約42万人の県系人が各分野で活躍しており、沖縄と世界の架け橋として国際交流・協力を大きな役割を果たしております。

沖縄県の策定する「沖縄21世紀ビジョン」では「世界に開かれた交流と共生の島」を掲げ、世界中で活躍するウチナーンチュとのネットワーク強化、特に次世代の担い手となる若者の育成に力を入れて取り組んでいるところ です。

海邦養秀ネットワーク構築事業は、沖縄県内の15歳から25歳までの学生を海外沖縄県人会へホームステイ派遣し、海外県系人の雄飛の精神や、国際感覚を学ぶとともに、海外の同世代のウチナーンチュとの友情を育むことで、将来に渡ってウチナーネットワークを発展させていくことを目的としています。2007年のスタートから2015年までに7か国13県人会へ98名の若者を派遣してきました。

2016年は、沖縄県人移住110周年を迎えたペルー共和国ペルー沖縄県人会へ大学生5名、高校生5名の計10名を派遣しました。

ペルーへ渡った先人達は、気候風土や言語、生活習慣の異なるなか、第二次世界大戦中における排日運動など様々な困難に直面しながらも、ウチナーンチュとしての誇りを胸に試練を乗り越え、異国の地で確固たる地位を築きました。今回の研修において学生達は、移民の歴史に関する講義や南米初の日本人入植地であるカニエテなど移民ゆかりの地への訪問を通して、先人の高い志や不屈の精神を学びました。

また、学生達は、現地の青年とスポーツ交流や日本文化を学ぶプログラム等を通して、深い友情を育みました。さらに、ホストファミリーの皆様には本当の家族のように温かく接していただき、滞在期間中、不安なく充実した日々を送ることができました。「いちやりばちよーでー」という黄金言葉を体現するように、学生達はペルーで出会った方々と、同じウチナーンチュとして、現在は異なる文化や言語の違いを越え通じ合い、生涯続く絆を構築することができました。

研修の締めくくりには、県人会主催により盛大に催された沖縄県人移住110周年記念式典にも参加させていただきました。

学生達からは、式典でのエイサー演舞や三線演奏などを目の当たりにして、ペルーの県系人の沖縄に対する熱い想いを全身で感じ、心を強く揺さぶられたとの報告がありました。学生達にとって、地球の反対側で脈々と受け継がれるウチナー文化に触れたことは、ウチナーンチュとしてのアイデンティティーや、沖縄のソフトパワーに秘められた可能性について深く考えさせられる大変有意義な体験だったことと思います。

この度の研修で、参加学生が得た印象深い経験の数々は、今後彼らが大きく飛躍し、沖縄と世界を結ぶ架け橋となる上で、かけがえのない財産になると確信しております。特に現地の方々と国境や言葉の壁を越えて育んだ強い絆は、将来彼らが世代を超えてウチナーネットワークを発展させていくための礎となるに違いありません。彼らは、研修から2か月後に行われた第6回世界のウチナーンチュ大会及びその関連行事にも積極的に参加するなど、すでにネットワーク発展のための第一歩を踏み出しており、その交流の輪は今後益々広がっていくことでしょう。

結びに、ペルー沖縄県人会屋良アルトウロ会長、ホストファミリーの皆様を始め、本プログラムに御協力いただいたペルー・沖縄の関係者の皆様には、前途有望な沖縄の若者達に、次世代のウチナーネットワークを担う上での基盤となる貴重な体験を与えていただいたことを心から感謝申し上げます。

いっぺーにふえーでーびる。Muchas gracias.

海邦養秀ネットワーク構築事業実行委員会

会長 照喜名 一

(沖縄県文化観光スポーツ部文化スポーツ統括監)

目次

はじめに	1
参加者 & 引率者	3
事業スケジュール	4
現地活動日誌 ～ペルー本研修にて学生が綴ったブログより～	5
参加者感想	13
派遣後の活動～研修での学びを学校の授業やイベントで発信し活躍！～	25
派遣後アンケート	28
編集後記	31



参加者 & 引率者



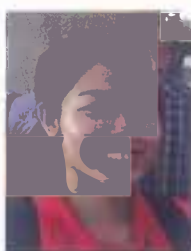
武内 あい
向陽高等学校2年



佐渡山 水萌
琉球大学2年



謝敷 揺
開邦高等学校2年



新垣 梨依乃
慶應義塾大学2年



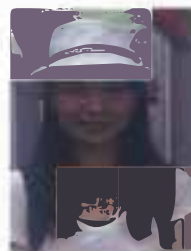
与座 晨
宮古高等学校3年



城間 美貴
名桜大学3年



渡嘉敷 慈安
読谷高等学校3年



宮城 亜希
沖縄国際大学3年



大城 藤生
豊見城南高等学校3年



神谷 純輝
沖縄大学4年



当山 樋口 アルトウーロ
沖縄県 交流推進課



玉代勢 興順
沖縄県 交流推進課



石川 実奈美
株式会社 国際旅行社

事業スケジュール

日程	内容	場所
4月18日(月)	参加者募集告知開始	
5月21日(土)	参加者募集説明会	JICA沖縄国際センター
6月27日(水)	応募〆切	
6月8日(水) 9日(木)	面接	沖縄県庁
6月20日(水)	参加者決定	
7月9日(土)	第1回事前研修 内容:アイスブレイキング、保護者説明会、自己紹介、ペルー調べ学習の共有、沖縄移民学習、スペイン語	JICA沖縄国際センター
7月23日(土) 24日(日)	第2回事前研修(宿泊学習) 内容:アイスブレイキング、ファミリーストーリー共有、沖縄移民～多文化共生、ペルー文化、スペイン語に親しもう、アンドレスさんのお話とダンス、チームミーティング(チームのルール、出し物等)、現地情報	JICA沖縄国際センター
8月6日(土)	第3回事前研修 内容:沖縄市で日系ペルーの方と出会い、想いに触れる、出発にむけて確認	沖縄市コザインターナショナルプラザ(KIP)
8月16日(火) ～ 8月31日(水)	現地プログラム (次ページに詳細記載)	ペルー研修
10月8日(土)	事後報告会	JICA沖縄国際センター
11月19日(土) 20日(日)	おきなわ国際協力・交流フェスティバル2016参加	JICA沖縄国際センター

現地活動日誌

～ペルー本研修にて学生が綴ったブログより～

1日目:8月16日(火)

ペルーへ出発!



↑
いつてきまーす

Hola! 待ちに待ったこの日がとうとうやってきました!
海邦養秀ペルーチーム出発です!

10時に集合して荷物を預けたあとは出発式!
フワフワしていたみんなの顔は、多くの関係者とメディア
を前にして一気に引き締まりました。ひとりひとりが決意
表明を行い、出発ムードも最高潮に達しました。

～成田到着!～

那覇空港を出発した私たちは、無事成田空港に到着し
ました。ペルーへ向けて良いスタートを切ったかのよう
に感じていたペルーチームでした。

笑みを浮かべながら歩みを進めています!

これから多くの試練が待ち受けていることは知らずに...

～ギリギリセーフ!!～

荷物や登場の手続きを終え、出国審査を受けて、搭乗口
に向かっていたその時

『4時15分発 アトランタ行きに搭乗されるお客様はいま
せんか?』

というスタッフの声

『はい、私たちです。』

『急いでください!すでに搭乗始まっています!』

慌てて駆け込んだ私たちを待っていたのは、スタンバイ
オーケー!後はあなた達を待つだけです!と言わんば

かりのスタッフと乗客の視線...。ごめんなさい!

～飛行機に乗れない～

12時間のフライトを終えアトランタに到着した私たちで
したが、ここで最大の試練が待ち受けていました!

入国審査を受けるための長蛇の列に並んでいる間に、リ
マ行きの飛行機が出発してしまいました。半ばから薄々
感じていた私たちでしたが、まさか本当に乗れないとは...。
なんとか近くのホテルをおさえてもらうために航空会社の
カウンターに向かったもの、そこにも長蛇の列...

さすがにこれは参りました(泣)

そんなこんなで空港を出れたのはアトランタに到着して
から4時間以上も後のことでした...imucho cansado!



長い長い1日が終わりましたが、まだまだ初日!明日か
らの活動では、どんなハプニングが起こるのか、期待と
不安に胸を躍らせながら第一日目の日記とします。

iHashita manana!(笑)

2日目:8月17日(水)

Hola!

アトランタを散策しました。電車は、日本とは違い、座
席が長椅子ではなく2、3人が座れるほどの椅子が置か
れていました。また、窓ガラスが大きく景色を楽しめまし
た(^_^)

電車を降り、街中を歩くと高く大きなビルに囲まれ、
新鮮でわくわくしました。



オリンピック公園がありました。

公園は、広くて緑が映えるとても綺麗な場所でした。

アトランタは、コココーラ発祥の地ということで、大きなコココーラミュージアムがありました。

空港内にあるフードコーナーで昼食を食べました。英語での注文は、緊張しました。

出来上がると名前と呼ばれる方式だったので、レシートに自分の名前が入っていてとても感動しました。その後リマへ向かいました。

機内食は、量が多かったです…笑

ようやくリマに到着。

思ったよりも時間が押してしまい、遅い時間だったのですが、ホストファミリーの方々がとても温かく迎えてくれて嬉しかったです。



←
ようやく到着しました。

その後、それぞれのホストファミリー宅へと向かいました。

3日目：8月18日(木)

ロストゲージの影響もあり、午前は各自ホストファミリーと過ごすことになりました。一部のメンバーと文化会館に行ってきました。博物館、神内センターにお邪魔しました。



見学したり、歌を歌ったりして楽しみました。

午後は空港から近いヘソマリアから17kmほどはなれたアテにある沖縄県人会で交流を楽しみました。市町村紹介、歌、そしてクイチャーをして交流を楽しみました。県人会の皆さんとても、ウェルカムな雰囲気とてもよかったです。



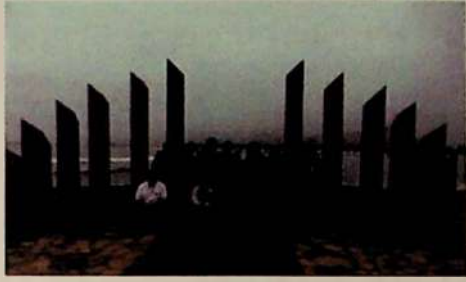
4日目：8月19日(金)～セロアズル～

セロアズルとはペルー移民の日本人が乗った佐倉丸が上陸した港です。



ペルー移民の始まりの地を訪れることで移民の歴史をまたひとつ知り、移民の歴史の長さ、つながりの強さなどを実感することができました。

移民の歴史を表すモニュメントの前で記念撮影しました。



～慈恩寺～

セロアズルの次にカニエテ市にある慈恩寺というお寺に行きました。

慈恩寺というのは、上野 泰庵(うへのたいあん)が南米初の布教使として派遣された際に創建(1907年)した南アメリカ大陸最古の寺院です。

第1代目 住職の上野氏から6代目まで続き、今はカニエテ市内に住む、大城さんによって管理されています。

寺に入ると、メンバー全員で線香をあげました。



寺の裏には、宗教的な問題で家庭で管理することが難しくなった家族の方々が、預けている位牌・遺骨が埋葬されていました。

その後は、近くのレストランで豚肉を使った料理を食べました。ペルーでも豚肉の全部位を食べているそうです！沖縄のソーキと同じ匂いがして何か懐かしさを感じました。



最後にペルーの有名なピスコ(お酒)の工場見学をし、ちょっとしたアクティビティをして楽しみました。とても、内

容の濃い1日で学ぶことが多くありました。

5日目：8月20日(土)

ティティカカというお店でご飯を食べながら、ダンスを見て楽しみました。ペルーの伝統踊りを間近で見ることができて、とても良い経験になりました。一つ一つの踊りに意味があってとても深いな～と思いました。最後はみんなまで踊りました！！



夜は日系人協会に行きました。まず、バスに乗って三ヶ所の公園でゲームしました。内容は鯉のぼりと七夕ひな祭りをモチーフにしたゲームでした。

初詣でおみくじを引く日本の文化をペルーで体験しました。2チームに分かれて、紅白ダンス対決も楽しみました。ペルーで日本文化を体験できるとは思いませんでした。このゲームは日本文化を知らない、日系3、4世の人に日本文化を知ってもらいたい意図があると言っていました。日本のカルチャーを他国に知ってもらい、継承してもらうことはとても嬉しいことだと思いました。



6日目:8月21日(日)

沖縄県人会の青年部の方々とスポーツをして交流をしました。

バレーボールとサッカーをしました。皆それぞれが、スペイン語の単語を使えるようになり、簡単な言葉で気持ちを表現し、交流を図りました。



また、この日は沖縄ペルー移民110周年の式典が週末に控えているということもあり、多くの方々が式典に向けて練習に励んでいました。私達も少しお手伝いをさせていただきますました。

そしてここ数日ペルーでは異常気象が続いており、気温差で体調を崩しやすくなっています。残りの日程も有意義に過ごせるよう、より体調管理に気をつけて頑張っていきたいと思います。

7日目:8月22日(月)

お昼前に集まり、ペルーの料理であるセビーチェとロモサルタードという料理をを教えてくださいました!!

3人ずつのチームに分かれての慣れない作業をみんなで協力し、楽しみながら作ることができました。

自分たちで作った分、美味しく感じました。

また、同じ材料で、同じ手順で作ったはずなのに仕上がりの味に変化があり、面白かったです。



仲宗根さんから、沖縄の移民の歴史について学び、県人会の会長の歴代写真などを見ました。

さまざまな歴史背景があり、すごく勉強になりました。

その後、舞台のある部屋へと移動し、カニエテやクスコのダンスを教えてくださいました。腰を使ってのダンスは、難しくなかなかうまく踊れませんでした…笑
最後は、みんなで衣装を着てダンスを踊りました。刺繍のカラフルな衣装で着ることができて嬉しかったです。



貴重な体験をすることができた1日でした。

今後もどのような体験をできるのか楽しみです…

体調に気をつけながら頑張っていきたいです!!

8日目:8月23日(火)

午前中は、ラビクトリア日系人学校を訪問しました。日本からペルーへ帰国した生徒のための、放課後特別クラスがあったり、子供達がお昼休みにお菓子を食べていたり、日本とは違う環境が感じられ新鮮でした。



サッカー留学を理由に日本から来た生徒や、1ヶ月前にペルーへ来たばかりの生徒などもいて日本語でお話しをしました。異なる環境のなかでも子供達は明るく元気に頑張っている姿が印象的でした。

午後は、カトリカ大学を訪問しました。カトリカ大学は総合大学で、とても広い敷地を有しており大学内に古代の遺跡もあり大変驚きました。施設も充実しており、カフェテリアや学生の自主学習施設などが多くの学生で賑わっていたり、大学内の芝生の上でグループワークをしていたり、沖縄の大学との違いが感じられました。

この研修も終盤に差し掛かってきました。体調に気をつけ頑張っていきたいと思います。

午後に行った、ラス・レジェンダス動物公園(Parque de las Leyendas)についてです！

リマにあるこの動物公園は、広大な敷地の中に4つの気候のゾーン(山岳、熱帯雨林、海岸とインターナショナル)があります。今回私達は、山岳ゾーンと熱帯雨林ゾーンの2つを見学しました。

山岳ゾーンでは、アルパカやリヤマ、ビクーニャなど、沖縄では見られない動物を見ることができました。



熱帯雨林ゾーンでは、アマゾン地帯に生息するサル、ピューマやジャガーなどを見ることができました。どの動物も、沖縄よりもサイズが大きくて驚きました。さらに、この動物公園にはプレインカ時代のワカと呼ばれる遺跡があり、リマの歴史遺産に触れる良い機会となりました。



9日目:8月24日(水)

【LA UNION(ラウニオン)日系人学校、AELU】を訪問してきました。

まずはLA UNION日系人学校からスタート！

こちらの学校はリマにある日系人学校のなかでもっとも規模が多く、1000人近くの生徒が在籍しています。日系人学校といっても通っている生徒は日系人が3割程度で、帰国子女や現地の方が多くいます。わたしたちは中学生の化学と物理、小学生の図工と歴史の授業を見学させていただきましたが、実験に熱中したり活発に発言したりする姿が印象的でした(^^)

併設されているAELUはとて大きかったです！AELUとはアソシアシオン・エスタ・ディオ・ラウニオン・アエルの略称で、総合運動場のことを指しています。プール等とても施設が多くて、そのサッカー場、凄さを表現してみると、、、県総とカーブスとセルラースタジア

ムとスポッチャと……沢山ちゃんぶる一されているような感じでした。)

午後は各々ホストファミリーと自由行動しました。わたしもファミリーとスーパーやミラフローレスにいったり、アンティークチョコを食べたりできてとてもhappyな夜を過ごせました！！

ペルーでの滞在もあと5日！慣れてきた頃には帰国が近づいてきています(T.T)残りの日程も楽しんで過ごしていきたいです！！



10日目：8月25日(木)

今日は午前中はラモリーナ国立農業大学に行ってきました！

6000人の生徒と500人の先生、広大な土地を持つラモリーナ大学ではアルパカの研究を見たり、農場、牛舎の見学をしました。

研究室では難しい言葉が飛び交っていて、理解が追いつけなかったのですが、すごいことをやっているということは分かりました！

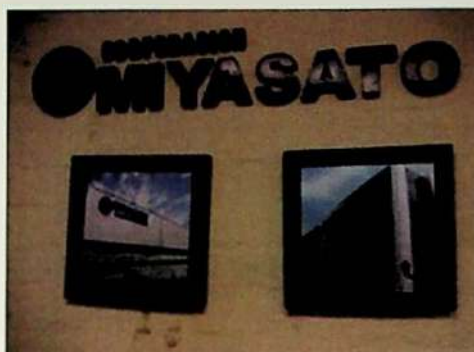


午後はミラフローレス区を散策。

インカマーケットでは待ちに待った『マスバラート(もっと安くして)』を使って買い物をしました。

市場のいたるところでマスバラートが飛び交っていましたね。楽しい買い物ができました。

11日目：8月26日(金)



今日の活動は、ミヤサトガラス工場見学でした。輸入したガラスを加工して輸出するまでの工程を見ました。自動車の前面ガラスやビル等の安全ガラスに加工してました。

僕たちが見学した工程のところでは、窓枠を製作・加工をしている部署を見学しました。材料は、主にプラスチックとのことでした。

工程は、3つあって、
・窓枠のプラスチックを切る
・窓枠を繋げるための穴を開ける
・窓枠を繋げる
でした。

見学を終えて、会議室で小休止を取りながら、ミヤサトさんから、工場の話をしてくださいました。ミヤサトガラス工場は、最初の移民の時に、ミヤサトさんのお祖父ちゃんがガラス加工会社を起業して、家族だけでやってたのが、今では、とても大きな会社になったと話してくださいました。



質問の時に、『あなたにとって、ガラスとは？』と聞いたところ、「ガラスは、今のこの会社になるための、先

祖の第一歩の物で、家族と一緒にとても身近にあったもので、家族のようなモノ」と言っていました。

とても、感動しました。

午後は、休憩を取って、夜の7時ぐらいから、それぞれの出身・居住している市町村の会に行きました。

僕は、沖縄市の市会に出席しました。

「そこまでフォーマルじゃないから私服で良い」と言われていたのですが、行ってみると、来客皆、正装で来てて、ちょっと、気まづくなりました(苦笑)

ですが、内容は、そこまでフォーマルではなく、沖縄市会の35周年を祝ったり、音楽を流したり、ダンスを観賞したりして、あまり、堅苦しくは、ありませんでした。皆、楽しい時間を過ごしていました。

12日目:8月27日(土)

Hola!

今日の内容は、ペルーへの沖縄移民110周年式典です。

沖縄からの招待者が来て、ペルー移民110周年記念を祝いました。

祝いの本番は、明日、日曜日です。

今日は、その前に、最初の移民の方々へのお祈りをしました。お坊さんも来てて、緊張しました。

式典は、ちょっと、お葬式みたいな感じでしたが、移民してきたご先祖様へのお祈りをしました。

その後は、グループ皆で集まって、スーツ姿で記念写真を撮りました。



今日は、これで1日の活動が終わりました。

皆各々のホームステイファミリーと過ごすことになりました。

13日目:8月28日(月)

今日は、記念すべきペルー沖縄県人移民110周年記念式典への参加をしました。



参加者には、金秀グループ会長・県知事・ペルー日本大使・各市町村長を含む多くの方々がお参加・御出席。110周年という節目の年に、式典に参加させて頂いたことを心より感謝します。

1906年に36人の移民者から始まり、今も尚多くの県系人を残してくれた1世の方々はとても素晴らしいと思いました。

式典後には、外の別会場でペルー沖縄青年部・花わらびによる歌や踊り(民謡)などで沖縄にいると錯覚を起こすぐらいのパフォーマンスを見せてくれました。今日は、人生の中でも忘れられない日となりました。

14日目：8月29日(日)

ペルー最終日は午前中にリマのプラサアルマスを散策しました。

街並みは建物がヨーロッパ風でした。



そして、ファストフード店などは京都のように街並みに合わせて茶色を基調とした建物でした。

大統領官邸で正午に行われる衛兵交代式を見学しました。交代式では音楽隊の演奏に合わせて衛兵が行進を行っていました。

午後は県人会の方にさよならパーティーをしてもらいました。その後に空港へ行き、みんなで最後のお別れをしました。



みんな沖縄へ帰りたくないというほどペルーが大好きになりました。

私たちが温かく迎えてくれて家族にしてくれた県人会のみなさんに心から感謝しています！

ありがとうございました。

では、これから沖縄へ帰ります！

15日目：8月30日(火)

夜中の1時前にリマを出発し、6時間かけてアトランタへ行きました。

次にアトランタから成田へ向かいました。

飛行時間は13時間と長かったです。

機内では食事やおやつが出ました。

そして、成田へ到着後、日本食が恋しくなり、一部のメンバーで日本食を食べました。

その後、成田から3時間かけて沖縄へ到着しました。

無事、全員で沖縄に到着しました！

空港では多くの方に迎えてもらいました。



この事業に参加したことでそれぞれが確実に成長することができたと思います。

本当に周りの方のサポートのおかげだと思っています！ありがとうございました!!!



参加者感想



名桜大学3年 城間 美貴

今回、このプログラムに参加することで世界にいるウチナンチュはどのような生活をし、ウチナンチュの文化や心をどのように継承し続けてきたのか知ることができるのではないかと考えました。

事前研修では沖縄移民の歴史や沖縄県に

来ている他国のウチナンチュから話を聞き、アイ

デンティティの葛藤や差別について知ることができました。ペルーへ行く際はアメリカのアトランタを経由しました。行く途中からハプニングが多く、到着日も1日遅れてしその上メンバーの半分がロストバゲージにありました。しかし、到着が夜中にも関わらずペルーのウチナンチュのみなさんが横断幕を持ってお出迎えをして



くれました。そして、各自のホストファミリーと顔合わせをすると私のホストマザーが「私の子ども」と言って力強くハグをしてくれました。このハグによって私はペルーに来てよかったと思った最初の瞬間でした。

ペルーでは県人会の方や日系人の方たちとの交流、ペルー料理を作ることで文化に触れ、学ぶことができました。また、県人会の方と一緒に移民が始まった場所「セロアズル」へ行き、移民の歴史に関する授業を行ってもらいました。それによって、移民したウチナンチュは言葉や文化も知らない土地で差別を多く受けたが、ウチナンチュとしての誇りを忘れずに現在も大きな県人会を作りあげてきました。その授業によって私たちウチナンチュには誰にも負けない強い心と絆が存在するという事を知り、私もウチナンチュであるということに誇りを持ちました。

そして、今回のプログラムのメインはペルー移民110周年式典に参加することでした。式典では沖縄から翁長知事や議員も来られていました。また、式典だけではなく、県人会館の外ではステージで多くの催し物が行われていました。そして、ペルーの方たちがエイサーを行っていました。そのエイサーを踊っているペルーの方たち



の表情から誇りをもってエイサーを踊っていることが伝わり、非常に嬉しくなりました。沖縄からみて地球の裏側にあるペルーで沖縄の文化を誇りに思い大切にしてくれている姿は沖縄県に住んでいる私たちが見習うべき姿だと感じました。また、フィナーレには沖縄らしく出演者、観客全員でカチャーシーを踊り会場にいるウチナンチュが1つになることができました。

ペルーへ行ったことで世界にいるウチナンチュのことを沖縄にいるウチナンチュに伝え、文化の継承やウチナンチュの絆をこれからも強めていくために周りに広めていくことが必要だと考えました。また、沖縄県を含む世界にいるウチナンチュにもこれから各国で沖縄の心を継承してもらうためにウチナンチュネットワークの架け橋になりた

いと思いました。そのために、5年に1度のウチナンチュ大会へ参加し、私自身が率先して世界のウチナンチュと繋がることが必要だと思いました。そして、実際に私は名桜大学で開催された学生サミットや若者ウチナンチュ大会、メインイベントのウチナンチュ大会へ参加しました。そこでペルーの方と再会し、さらにハワイ、ポリビア、アルゼンチン、ブラジル、アメリカのウチナンチュと繋がることができました。なので、この繋がりによって各国の県人会の活動や想いを世界にいるウチナンチュに伝えられるようにこれから様々な活動を行っていきたいと思いました。



沖縄国際大学 3年 宮城亜希

那覇空港を出発し、途中で乗り継ぎのトラブルがあり、ペルーに到着したのは予定の日より1日遅れた夜中の1時。それにもかかわらず、空港には大勢の方々が暖かく迎えてくれていて、とても嬉しかったのを覚えています。食べ物、治安、スペイン語ができない点で不安



はありましたが、ホストファミリーの安座間家の皆さんに支えていただき、2週間安心して過ごすことができました。特に、体調を気にかけてくださったこと、限られたフリータイムに時間を合わせて一緒に出かけてくれるなど、多くのサポートをしていただきとても感謝しています。

私は今回の研修で、沖縄の文化を伝えること、日本語教育について知ること、ペルーの移民や県人会について知ることの3つを目標に出発しました。



滞在期間中の文化交流として県系ペルー移民110周年式典にて、三線をペルー沖縄県人会の60人を超える方々と一緒に弾く機会をいただきました。また、元県費留学生が同時にかぎやで風を踊る演舞があり、手や足さばき、タイミングなどを指導しました。交流していくなかで、独自にテンポの数え方などを考えている彼らの姿を見て感銘を受けました。

ラ・ウニオン学校とビクトリア学校では、実際に日本語教育が行われている現場を見ることができました。これらの学校では日本語を授業の中に盛り込むだけでなく、日本からペルーへ来たばかりの生徒へスペイン語を教える手助けをしていたのは予想外でした。日系人の生活の手助けや日本語の継承という面で、日系学校という教育現場は海外でどのような役割をもっているのか実感することができました。また、私は日本語教師資格を取得するための講義を大学で受けており、今回の学校見学での経験を活かしていきたいと考えています。



県人会での活動で一番印象的だったのは、青年部などの若い世代の活動がとても活発だったことです。個人個人、仕事や学校で忙しいにもかかわらず、毎回イベントの度に練習場所に夜中まで残り、何種類ものペルーのダンスや創作ダンス、沖縄の芸能などを練習していました。彼らの熱心な姿を見ていると、尊敬と同時に一体何が彼らの気持ちをそこまで動かしているのか疑問に思い、詳しく話を伺いました。「僕たちのふるさとが沖縄だということを誇りに思う。」「沖縄の文化をペルーでやることによって、沖縄のことを知らない人達にも知ってほしい。」「アイデンティティで悩むことがあっても、県人会館に来ることで安心する。」という言葉が印象的でした。ペルーで活躍している彼らのエネルギー

を目の当たりにし、私達のこれからの活動を考える良い機会となりました。これからも県人会と交流し、互いの理解や尊敬につなげることを、そしてこれから沖縄を訪れる方々が安心して過ごせるような暖かい環境づくりをしていくことが目標です。

この研修の2週間を振り返ると、三線、舞踊、聞こえてくる言葉や県人会のコミュニティなど、“地球の裏側の沖縄”がペルーにはありました。ありがとうございました。



沖縄大学 4年 神谷 純輝

今回のペルー研修を漢字一文字で表すと「愛」です。ペルー研修では多くの愛を感じることができました。私たちが初日ロストバゲージをして、空港に遅い時間になった時もホストファミリーを含めペルー沖縄県人会のみなさんは温かく迎えてくれました。彼らの対応によって私たちは飛

ぶ前に持っていた不安を消しさることができました。ホストファミリーはまるで自分の息子のように私に接してくれ、とても愛にあふれた家庭で感激しました。また、ペルーでの生活はとても見るものすべてが新鮮で日本とペルーを比較したり客観的に見たりすることができました。さらに気づいたことは県系人の活躍が素晴らしいことです。街の至る所に県系人が建てた飲食店や経営するショップが多く、ペルーと日系人のミックスした社会の中で



まく共存していると感じました。現在ではペルーで日系人が当たり前のようにいる社会だが、昔はどんなだったのだろうか？まったく異国の地で言葉もわからず環境も全く違うペルーの地に降り立った1世の人たちはどんな気持ちであったのだろうか？どんな努力をしてきたのであろうか？など考えるようになりました。そのような疑問を抱きながらペルー県人会の仲宗根さんの話を聞くとペルー移民のことも県人会のことを詳しく知ることができました。仲宗根さんの話「1世のときはとても厳しい環境で主に畑仕事であった、徐々にお金を貯めて街で飲食店を開き、サービス業をするようになり生活が安定してきて、それから初めて降り立った人たちの家族も移民してきて今の2世や3世につながっている。それから当時から沖縄県系人は集まって交流をし、のちに県人会ができた」と話していました。この話を聞いて昔の状況から今に至るまでがわかりました。ペルー移民された県系人はとても強く、たくましい人たちだと思いました。彼らはつながりを大事にするゆいまーる精神を持って、県人会を110年間存続させてきました。また、彼らは沖縄が第二次世界大戦に見舞われた時、ペルーから物資を送り沖縄を支え続けてきました。戦後復帰ができたのもペルーにいるうちなんちゅのおかげだと知りました。1世2世だけではなく、みなアイデンティティは沖縄だという誇りをもって生きていました。これは私たちが一番大切にするものだとして海外に出て初めて知ることができました。



特に110周年記念式典のとき、私たち海邦養秀のメンバーは彼らの努力に感動しました。私が一番心動かされたのは自分たちのルーツである沖縄を愛していて、沖縄の歴史、文化、を上の世代が若い世代に継承していく努力していたことでした。また、若い世代も沖縄文化を途切れないように積極的に活動をしていました。地球の裏側でありながら、うちなーぐちで話したり、三線を習った

り、踊りを習ったり、イベントがあれば沖縄の文化、芸能を表現したりと努力をしていました。一方で私たちは沖縄に住んでいながら、オジー、オバー、父、母、からはこのようなことを習うことはほとんどなく、沖縄のうちなーぐちや三線や踊りでさえも若い世代には伝わっていません。文化継承をしていく心は見習わなければならないと強く思いました。式典も県人会のみなさんの準備により最高の状態で式典とフェスティバルを迎えることができました。最後のフィナーレでダンスをみんなで踊った時はこみ上げるものがありました。自然と「沖縄人であった、地球の裏側にも沖縄のアイデンティティを持って、伝えている人がいるんだ。沖縄に戻ったら自分たちも伝えていかないとイケんな！」と思い感動しました。

これから私たちはペルーで学んだことを生かして、うちなんちゅーとしてどのように生きていくかを考え、行動しなければなりません。私は今よりもっと沖縄のことを学びうちなんちゅーの誇りを持ち、同世代や下の世代に伝えていく活動をします。



慶應義塾大学 2年 新垣 梨依乃

現地の家庭にホームステイしながら、県系人のルーツを探ることのできるペルーでの2週間。大学進学にあたり生まれ育った沖縄を離れ、沖縄以外に住むウチナンチュの暮らしについて興味をもっていた私は、上記の点に惹かれて海邦養秀プログラムへの参加を決めました。

現地では県人会の皆さんとの交流、日系人学校への訪問、県系人が設立した企業への訪問、ペルー伝統料理作製などたくさんの貴重な体験をさせていただきました。それらの中でも特に思い出深いことは、県系移民110周年記念式典に参加させていただいたことです。2日間に及ぶこの式典では、移民1世に対する大きな感謝と、ペルー・沖縄両国の絆の強さに心からの感動を味わうことができました。また、私にとって初めてのホームステイ体験も、忘れがたい思い出です。ホストファミリーと指さし会話帳やジェスチャーを用いてコミュニケーションをとったことや、慣れ親しんだ日本の生活とは異なるペルーの生活を体験したことからは、想像以上にたくさんの「気付き」がありました。

今回の派遣を通して印象に残っていることは、現地県人会の皆さんの沖縄に対する熱い思いと、伝統文化や県人コミュニティーを存続させようとするパワーです。これは私がウチナンチュとして忘れていた心ではないか



と思います。日本語も話せない、ましてや日本を訪れたこともない県系人が増える一方で、祖国を大切に作る心はしっかりと継承されている点に感銘を受けました。私の大好きな言葉、「いちやりばちよーでー」。現地でファミリーとして暖かく迎え入れてくださった県人会の皆さんこそ、出会えばみな兄弟というこの言葉の持つ意味を体現されていると感じました。

帰国後、今回の派遣で得られたものを形にしたいとの思いから、私は目標をたてました。それは、「大学での学びとラテ

ンアメリカを結ぶ」ということです。具体的には、現在大学で学んでいるマスコミ学の知識・ノウハウを生かして日系移民の情報発信に努めようと考えています。現地で得られた感動や、世界各地で生活しているウチナーンチュに目を向けることの重要性は、私たちが声を上げなければ伝わりません。現地に派遣された私たちがこの学びを発信し、周りの人たちをはじめ、沖縄県全体に伝達していかなければならないと使命感を抱いています。

私自身、事前研修や派遣、事後研修を通して、「自分がしたいことは何なのか」「何をすべきで、誰のために行動できるのか」に向き合うことができました。また、お互いに刺激しあえる大切な友人たちと出会え、地球の裏側にファミリーをつくることもできました。このプログラムに参加させていただき心から感謝しています。今後もこの素晴らしい事業が続いていくことを願っています。



宮古高等学校 3年 与座 農

私は海邦養秀ネットワーク構築事業で8月16日から31日までの16日間、ペルー共和国に行ってきました。

この事業に応募した理由は沖縄を離れる前に沖縄のことを海外のウチナーンチュとの交流を通して学びたいと思ったからです。

そのような思いで参加したこの事業では期待をはるかに上回る経験をすることができました。

まずは事前研修です。私たち参加者は、ペルーに立つ前に3回の研修を行いました。事前研修ではペルーのことについて調べたり共有したりしました。その中で一番印象に残ったのがカルロスさんやリカルドさん、アンドレスさんのお話です。それぞれが違うバックグラウンドをもっているにもかかわらず、彼らの中には共通してウチナーンチュとしての誇りがあると感じました。

そしてペルーでの2週間です。ペルーの家族になじめるかどうかとても不安というのが空港のゲートをくぐる直前までの私の正直な心境でした。しかし夜中の到着ロビーで私たちを出迎えてくれた大勢の笑顔を見た瞬間にその不安は消えました。

ペルーでは主に県人会館を拠点にして若者から年配の方まで大勢の方と交流を行いました。特に沖縄ペルー移民110周年記念式典では、ペルー各地や沖縄から集まった大勢の人と話をすることができました。県人会館で一番印象に残ったことはそこでは中学生からお年寄りまでが一つのコミュニティーを作って活動しているということでした。

私の地元宮古島ではこのような風景はめったにありません。しかしこのことが伝統や文化の継承を行う秘訣であるとわかり、帰国後は私が率先してこのような機会を作っていこうと決心しました。

また研修の中では沖縄ペルー移民の歴史を学習する機会がありました。その中では110年前にペルーという地に渡った先人たちの苦労や努力を知ることができました。そして私がかような強靱な精神と体力、ゆいまーるの心を持った先人た



ちと同じウチナーンチュであることに誇りを持つことができました。そして歴史を学ぶことの意義を学びました。

この2週間で私はペルーに家族と友達ができることができました。世界に広がるウチナーンチュの絆を見ることができました。私自身がウチナーンチュであることを誇りに思いました。そしてこれからの沖縄を担っていく人材として、沖縄や地元宮古島の歴史や文化をもっと学んでいこうと決心しました。その一環として去る10月の27日から行われた世界のウチナーンチュ大会に参加してきました。初めての参加でしたが、想像以上の外国からの参加者に驚きました。そのなかには親戚に会いに来た人、おじいやおばあの故郷に初めて来た子供たちなど、様々な目的の方がいました。それを見て私は、また帰ってきた居場所、また会いたい人がいる場所、ぜひ一度訪れてみたい場所「沖縄」の存在意義を深く感じました。

これらのような経験は、遠く離れた宮古島に住む人は簡単にはできません。だからこそ私はこの経験を支えてくれたすべての方に感謝して、率先してこの経験を宮古島の人たちに伝えていく義務があると思います。残り少ない高校生活ですが、これから島を離れていく同級生を中心にウチナーンチュであることの素晴らしさを伝えていきたいと思います。



開邦高等学校 2年 謝敷 揺

私は、海邦養秀で移民の歴史や文化を学ぶためにペルーに行きました。

ペルーでは、移民110周年記念式典、市町村のパーティーへの参加、伝統料理でもあるセビーチェやロモサルタード作りやダンス、スポーツ交流、学校訪問など様々な体験をさせていただきました。私にとっては、とても貴重で濃い2週間でした。

その中でも三つのことについて書きたいと思います。

まず一つ目は移民110年記念式典、市町村のパーティーへの参加についてです。

移民式典では、迎える側としてのお手伝いでした。その感覚がとても不思議でしたし、沖縄とのつながりや移民の歴史の長さをもっとも感じた体験でした。市町村のパーティーでは、北中城と出身である与那原町のほうに参加しました。北中城のパーティーは、すごい人数でびっくりでした。

またダンスを近くで見たり、舞台上に上がって歌を歌ったりしました。与那原町のパーティーでは、各テーブルを回って写真を撮ってお話をしたり、ダンスと一緒に踊ったりしました。自分の生まれも育ちもペルーであるのに、祖先の地元に対して大切に思っていて地元愛のようなのであふれているなと感じました。また、私自身の地元ことをすごく誇りに思える瞬間でしたし、知らないことがいっぱいあることに気付ける瞬間でもありました。

二つ目は、ホームステイをしたことです。私がお世話になったホストファミリーは、現在沖縄に留学できているみゆきさんの家族でした。与那原出身の方で昔の写真や町人会でやったこと、ペルーのことなどを教えてもらったりしました。私の話にも熱心に聞いてくれて、目標の一つでもあった異文化交流ができました。年の近い娘さんは日本語を話すことができなかつたので英語で会話を試みたのですが、いざ話そうとすると言葉がうまく出てこなくて、悔しい思いをしたので、英語をもっと勉強しなければと思いました。楽しかったのは、ホストマザーのナンシーさんと夜二人で家の近くを散歩したことです。たくさんのお店があつて、日本ではなかなか見られない果物がたくさん積まれている光景を発見したり、家に仏壇があつたりと驚きの連続でした。ホストファミリーは、すごく温かく、家族のように接してくれてペルーにもう一つ家族ができたようでうれしかったです。





三つ目は、私の遠い親戚にあったことです。ペルーに行く前、親戚のおばさんから姉がペルーにいるが、もう20年上あっていないため現在どうしてるかわからないということを聞きました。ナンシーさんに話したところ、少ない情報の中一生懸命探してくれて、会うことができました。九十歳を超えた今でも元気で、うれしかったです。一番は、私が普段お世話になっている親戚のおばさんとお姉さんを、テレビ電話を通じて合わせることができたことです。お互いに泣きながら話す姿に感動しましたし、二人の架け橋のような役割を担うことができうれしかったです。

私は、この研修で行ったペルーが初めての海外で、最初は正直不安が大きかったのですが、その不安を吹き飛ばすほど楽しく過ごせました。ペルーに行って学んだことは書ききれないほどあります。その経験を多くの人に伝えられるようにしていきたいです。また、研修後に参加した世界ウチナンチュ大会では、ペルーでお世話になった方を含め、世界には多くのウチナンチュがいて、誇りを持っていることを知りました。沖縄に住んでいる私たちは世界にいるウチナンチュに負けないよう、沖縄のことを勉強しなくてはならないなと思いましたし、世界にウチナンチュがいること、そして今沖縄に住んでいることを誇りに感じました。ペルーではたくさんの方と関わり、繋がることができました。この繋がりを一生大切に、もっと繋がりを広げられるようにしていきたいです。



豊見城南高等学校 3年 大城藤生

8月16日から31日までの2週間ペルー共和国にて、ホームステイをしました。那覇空港で行われた出発式では多くの報道者、事業関係者、保護者にも守られて決意表明をし、私はその中で「ペルーで学んだことを沖縄に持ち帰り、友人や家族へ伝える」という目標を立て飛び立ちました。はじめは、初海外ということで緊張と不安で目的意識を忘れそうになるほど、頭が真っ

白になっていました。しかし、メンバーの心得は、「全員がリーダー」だったので、私一人が表にその感情を出すとメンバー全体に影響してしまうので、逆に私自身が引っ張っていく気持ちで研修に臨みました。

東京の成田から約12時間の長いフライトを経てアメリカジョージア州アトランタに到着しました。そこから色々とお楽しみに見舞われ1日アメリカで1泊することになりましたが、その後、6時間飛行機に乗り、無事目的地であるペルー共和国へつきました。空港のロビーでは、深夜1時なのにも関わらず多くの県系人の方々がお出迎えをしてくれ、その瞬間に自然と不安も消え、それと同時に期待と安心感でいっぱいになりました。

私のホストファミリーのマエゾノ・金城一家は、日常会話がすべてスペイン語で、生まれて初めて朝から晩まで日本語以外の言葉にどっぷり浸かる日々が始まりました。始めの頃は、まったく理解ができずファミリーと少し距離が遠くなってしまいました。このままだと最終日まで続くと思った私は、積極的に引率者のアルトゥーロさん



から習った言葉で話しかけたり、身振り手振りをしてコミュニケーションを取ることができ、徐々にではありますが距離を近くしていきました。私はこの時に、「言葉が通じなくても、身振り手振りだけで思いは伝わる」ということを学ぶ機会になると共に、将来的にはスペイン語での会話をできるようにするという目標ができました。お母さんのアナさんは、いつも私の体調を気遣ってくれてとても優しい方でした。



ペルー沖縄県人会間は、とても広くサッカー場が2つ、ゲートボール場やバレーボールコート、プールなどがありそこでは、沖縄県人会青年部の方々とスポーツ交流を行い、友情を深め合いました。

今回の研修の一番の醍醐味である「沖縄県人移民110周年記念式典」では、県人会関係者と共に運営に携わりしっかりと沖縄の若者代表として参加して、ご焼香をあげて移民1世から始まった移民史を肌で感じることができました。式典後には野外ステージでエイサーやみんようなどのパフォーマンスが開かれ36人の移民者から伝わった沖縄の歴史・文化が今の時代(3世、4世)へ受け継がれ、県系人ではない日系人やペルー人にも伝わっていることも知り、改めてウチナンチュとして生まれて誇りを持つことができました。

私は、この研修のおかげで世界観が広くなり、まだウチナンチュとして足りない部分が多いことを気付かされました。

10月27日から3日間「第6回世界のウチナンチュ大会」が行われました。私は、いままでにイベントが何なのかさえわかりませんが、今回の事業に参加することでこの大会の目的、そして5年に1度しか開かれない特別な日に世界中からウチナンチュが集う盛大な祭りであることが分かりました。その中には、ホストファミリーも参加していて、お互いのルーツである沖縄で再び会うことができました。この経験は私と同事業メンバーにとって、忘れられない出来事になったと思います。

マエゾノ・金城ファミリー、ペルー沖縄県人会の皆さま、事業関係者の方、そして保護者に感謝しています。

「Muchas Gracias」



琉球大学 2年 佐渡山 水萌

私は親戚に移民者がいたため、今移民をした人たちはどのような暮らしをしているのかとても興味があり、また大学に入学し何もせずにいる自分自身を変えるチャンスだと思い、海邦養秀ネットワーク事業に応募しました。そして実際に今回は南米ペルーに行き多くの驚きと学び、「ウチナンチュの肝心」というものを強く感じました。また何よりも、私の人生においてターニングポイントとなる経験をさせて頂き、沖縄から遠く離れたペルーの地で「沖縄」を再発見したことにとっても驚きました。



今年は沖縄からペルーへの移民が始まって110周年という記念の年であったため、記念式典や沖縄県系人らによるパーティなどが多くありました。その際には必ずかぎやで風でスタートしたり、三線やエイサーなどが披露



されたりして沖縄の伝統が大切に守られていました。そのことに非常に驚き感動したと同時に、琉球舞踊も三線も分からず逆に教えてもらっている自分自身が恥ずかしくも感じました。またペルー沖縄県人会館で仲宗根さんという方から移民についてお話をいただいたときに、「ペルーでも1世の高齢化から移民についてよく知らない若者もいるが、今沖縄に住んでいる人たちはさらに私たち移民について関心が無いだろう。だから知ってほしい。」と話されていて、今こうやって現地に行っている私たちが沖縄の次世代を担う若者として果

たすべきことだなとも思いました。

そこで帰国後、より移民や沖縄の歴史について深く学びたいと思い大学で移民の授業を履修したり、三線を学んで世界のウチナーンチュ大会に参加したりしました。そしてペルーで学んできたことを発信するために、教授や沖縄NGOセンターの方々、ペルーからウチナーンチュ大会のために来沖していたカリナさんに協力して頂きながら授業の時間を頂き、報告会を行いました。実際に人の前に立って何かを伝えるということの難しさを痛感しましたが、これを新たなスタートとして沖縄県の代表としてペルーへ行かせて頂いたことやお世話になった方々へ少しでも恩返しできようように活動していこうと思います。

そして最後に、約2週間忙しいスケジュールの中、色々なところに連れて行ってくれたり現地の食文化について教えてくれたりと温かく迎え入れてくれた比嘉宮城ファミリーに感謝します。また、今回のウチナーンチュ大会で再会することもできました。

遠い地球の裏側に新しい家族が出来た事が私にとってなによりの宝物となりました。この研修で生まれた海邦養秀メンバーやペルーとの繋がりを大切に、次世代のウチナーネットワークの担い手として頑張っていきます。





読谷高等学校 3年 渡嘉敷 慈安

私がこの事業のことを知ったのは、父が留学のことを調べていた時に知りました。ペルーへの派遣だと知り、自分のルーツを知るために、いい機会だと思いました。私の両親は、ペルー出身なので、自分の先祖のことを知る事が出来るいい機会と思いました。

派遣の事前学習では、顔合わせから始まり、アイスブレイクをして、ペルーのことを調べてお互いに発表しました。私は、ミラフローレス区のことを調べました。事前研修では、スペイン語の基礎的な勉強もして、グループの絆を強くしていきました。

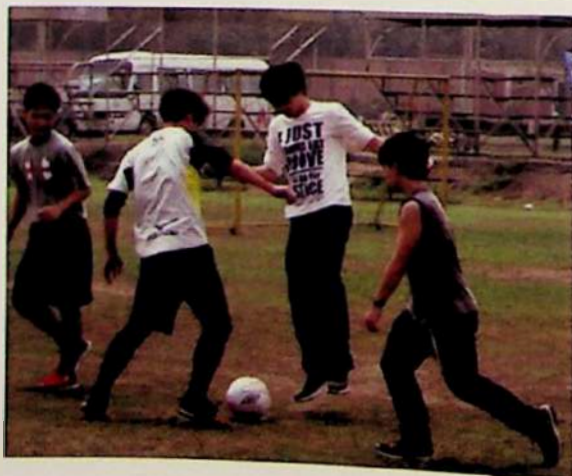
ペルーに行く準備も着々と進んでいき、8月16日にペルーへ出発しました。アメリカに着いた時に、ちょっとハプニングが起きて、アメリカに一泊することになりました。ハプニングは、アメリカの入国審査で3時間ぐらいかかって、ペルー行きの飛行機を逃してしまったことです。ですが、こういうハプニングも人生のうちでは、必要なことでもあると思いました。県のお金を使って研修に行かせてもらっているのに、不謹慎かもしれませんが、偶然にも2か国を知ることが出来て、とても良い経験になりました。

アメリカを一泊して、次の日午後に、ペルー行きの飛行機に乗りました。8時間飛行機に揺られて、ペルーに、深夜頃にペルーに着きました。そこで、再びハプニングが起きました。今度は、グループの大半のメンバーのカバンがアメリカに残ったままになっていました。皆、暗い顔、申し訳ない気持ちでカバン受け取り所を出ると、ペルーの沖縄県人会の方とホームステイのファミリーが皆笑顔で待っていてくれました。



私の父の姉も一緒に待っていて、とても嬉しそうに私たちを見ていました。皆で写真を撮り、もう深夜だったので、皆ホームステイファミリーと一緒にそれぞれ行きました。

次の日から、ペルーでの研修を始めました。スケジュールは、朝の6時ぐらいから夜の9時ぐらいまで、ぎっしりの研修でした。ぎっしりのスケジュールでありながらも、疲れることは、ありませんでした。研修は、大体沖縄県人会で行われて、そして現地での研修も行いました。第2次世界大戦のころの日本・沖縄からの移民たちのことを教えてもらいました。最初に移民が着いたのはセロアズル・カニエテという港に行きました。最初の移民が着いた



港跡で、石碑に書かれた意味を覚えてもらったり、その港近くの町を案内、教えてもらいました。ペルーでは、勉強以外にも、ペルー料理の勉強もしました。覚えてもらったペルー料理は、セビチェという生白身魚のサラダと、ロモサルタードという牛肉がメイン炒め物でした。私は、牛肉が食べれないので、鶏肉で作りました。初めて作ったものでも、皆で作ったものは、美味しかったです。そして、8月28日は、沖縄県人移民110周年記念日でした。その日は、沖縄県知事も、各市町村の議員や長たちが来ました。私たちは、光栄にも110周年記念式典に出席しまし

た。楽しい時間もペルーについての勉強時間も、終わりに近づいてきました。ペルー滞在最終日に、ペルーのラス・レジェンダス動物公園と、中央協会・大統領官邸区に行きました。動物公園では、ペルーのアルパカを筆頭に、多くの動物がおり公園の中央近くにプレインカ時代の遺跡があり、歴史遺産を見ることもできました。中央協会では、スペインがペルーを侵略した時からの時代を記していました。また、地下には、歴代のスペインの大将や協会の神父様などのお墓や骨がありました。昔のペルーの歴史を最終日にも、習うことが出来ました。見学が終わり、急いで空港に行きました。今回は、乗り遅れないように、余裕があるように、行きました。県人会の皆さんも、ホームステイファミリーの皆さんも、私たちも皆、ハグしたり、泣いたりして、離れがたかったです。皆、2週間だけ行ったとしても、もう、家族になっていました。ウチナーグチでも言うとおりの、「イチャリバチョーデ」でした。ペルーの第2の家族と別れて、無事ハプニングもなく、沖縄に着きました。

今回のペルー派遣研修を経験して、私は世界と沖縄のネットワークを広げて大きな家族を繋げる架け橋になりたいと思いました。そして、研修を始める前は、自分に自信がなく、人見知りでした。ですが、研修後の今は、自分に少しは自信があり、人見知りは、まだ治りませんが、人とは、ゆっくりでも、接することが出来るようになりました。この研修のおかげで私の視野も世界もネットワークも広がる素晴らしい経験でした。ありがとうございました。



向陽高等学校 2年 武内 あい

私はこの事業に参加する前までは移民のこと、世界のウチナーンチュのことについて多くは知りませんでした。しかし事前研修でのリサーチから始め、チームビルディングを進めていく中で少しずつペルーの移民を近くで感じる事ができていきました。事前研修では派遣先のペルーの気候や食事、ペルー沖縄県人会のことや移民の歴史などをリサーチし、メンバー全員で共有することで学びを深めることができました。

私がこの事業に参加して感じたのは「ウチナーンチュのつながりの強さ」と「感謝することの大切さ」、「文化を継承することの重要性」です。

まず「ウチナーンチュのつながりの強さ」についてです。これは世界各国のウチナーンチュにおいても言えることだと思います。ペルー沖縄県人会は、誰かに何かあれば心配し、楽しいことはみんなで共有する。そんな家族のようなあたたかいコミュニティでした。

私自身、研修中に体調をくずしてしまったことがありました。しかしそんな時、遠い沖縄からきた私のことを本気で心配し、気遣ってくれたのはホストファミリーや沖縄県人会の方々でした。その時にウチナーンチュはみんなで助け合うという「ユイマール精神」が地球の裏側のペルーでも根付いているのだと知り、とても感動しました。さらに沖縄の中でも、自分が西原町の出身だと言うと西原出身の方々はとても喜んで、暖かく迎えてくれました。また、研修後に参加した10月に開催された世界のウチナーンチュ大会では国という枠組みを超えて同じふるさとを持っている、ウチナーンチュであるというつながりを再確認し、そのつながりをより強くすることができ



たと思いました。大会中には世界のウチナンチュはウチナンチュであるということをとっても誇りに思っていることを知り、また5年後に帰ってきたいと思えるようなふるさと沖縄を作っていくのは私たち若者の使命だと強く感じました。

また「感謝することの大切さ」は改めて気づかされたことのひとつです。これまで感謝することを忘れていたわけではありませんが、ペルー沖縄県人会の方々、遠く離れたペルーへ移民し、大変な苦勞をしながら今日のペルー日系社会を築き上げた1世の方々に敬意、感謝していました。そんな姿を見て、私も改めて大切にしなければいけないことだと思いました。この感謝というのは今回の海邦養秀ネットワーク構築事業に携わってくれた全ての方々への感謝です。お世話になったホストファミリー、沖縄県人会の方々、家族、共に研修に参加したメンバー、事前研修から全てサポートしてくださった県庁の方々や旅行会社の方々などたくさんの方のおかげで私はこの事業に参加し、良い経験をする事ができました。そして何より沖縄県にはこの感謝をこれから少しずつ恩返ししていきたいと思っています。



そして「文化を継承することの重要性」を私自身ペルーでものごく考えさせられました。私が驚いたのはペルー沖縄県人会の方々には三線、エイサーもでき、さらにはうちなーぐちの勉強にも励み、次世代へ沖縄の文化を継承していく努力をされていました。それに比べ、沖縄の文化を知らず、何もできない自分がとても小さく、恥ずかしく感じました。沖縄のことをもっと深く知りたい、次世代へ伝える努力をしなければならないと思い、今はその一歩として三線に挑戦しています。また、「伝える」という意味では、この事業で学んだことを学校で報告する機会をいただき、私の経験を校内で共有することができました。それもまた私にとって良い経験となりました。

この海邦養秀ネットワーク構築事業に参加したことでより沖縄を好きになれましたし、自分のルーツやアイデンティティを再確認する機会にもなりました。また自分自身のネットワークを広げることもできました。ここで終わるのではなく、これから先もこのネットワークを大切に、より広く、より強くしていきたいと考えています。そしていつでもウチナンチュとしての誇りを忘れることなく沖縄もウチナンチュも大切にしていきます。

この海邦養秀ネットワーク構築事業に参加したことでより沖縄を好きになれましたし、自分のルーツやアイデンティティを再確認する機会にもなりました。また自分自身のネットワークを広げることもできました。ここで終わるのではなく、これから先もこのネットワークを大切に、より広く、より強くしていきたいと考えています。そしていつでもウチナンチュとしての誇りを忘れることなく沖縄もウチナンチュも大切にしていきます。

派遣後の活動

～研修での学びを学校の授業やイベントで発信し活躍！～

①実施日 ②場所 ③内容 ④感想

■城間美貴(名桜大学)

①2016年10月9日(日)

②名桜大学 サクラウム6Fスカイホール

③世界ウチナンチュ学生サミットを実施。

各市町村にいる海外からの研修生や県費留学生を集めた。そして、ウチナンチュ移民に関する歴史を学び、世界のウチナンチュの相互理解や交流を図った。私はそこへ実行委委員長として参加し、ペルーでウチナン



ナンチュの人と関わった経験を共有し、実行委員みんなでサミットを作り上げ、開催することができた。

④このイベントを実施したことで一緒に実行委員をした名桜大学生がウチナンチュの移民について興味を持ってくれました。そして、移民の人たちがいる地域への留学を希望する人も出てきました。また、大学外から来てくれた方からは名桜大学で移民の勉強をしたり、研修生と関わりを持ちたいと考えているという声を聞くことができました。それによって、ペルーでの経験での経験を色んな人に伝えることができ、改めてこれから自分のやるべきことも知ることができました。

■武内あい(向陽高校)

①2016年10月28日(金)

②向陽高校

③ペルーからウチナンチュ大会のために沖縄へ来ていた4世のカリナさんと一緒にクラスの友達にペルーのウチナンチュのことや沖縄移民のこと、自分が実際にペルーに行って経験したことを伝えました。

④1番に本当にこの出前授業をして良かったと思いました。

研修でペルーに行って終わりではなく、見たこと・感じたことを皆と共有でき、世界のウチナンチュの存在を少しでも知ってもらうことができ



たと思います。また、「移民のことを知れて良かった」、「自分も沖縄の文化を伝えていく努力をしていきたい」という声ももらってとても嬉しかったです。

■佐渡山水萌(琉球大学)

①2016年10月31日(月)

②琉球大学

③海邦養秀の報告会と移民のクイズ、学生から(カリナさん、なみえさん、ニコラスさん)への質問

④世界のウチナーンチュ大会の翌日であったため、ペルーから来沖していたカリナさんや中城村の研修生にも参加して頂き、より海外にいるウチナーンチュを身近に感じてもらえるいい機会であったのではないかと思います。参加した学生からは遠い南米にもウチナーンチュいるなんて知らなかった、面白かったと言ってもらえてとても嬉しかったです。また自分が研修を通して学んできたことを相手に興味を持ってもらえるように伝えることの難しさを感じ、これから工夫をしながらもっと移民をしたウチナーンチュのためになるようなことをしていきたいと思うキッカケになりました。



■与座晨(宮古高校)

①2016年12月13日(火)

②宮古島市立下地中学校、城辺中学校

③「アミーゴス！ペルーを知ろう！」沖縄移民発、多文化共生というテーマのもと、ペルー研修参加の報告とペルーの紹介を行った。

④宮古島は地理的に沖縄本島から離れているだけではなく、経済的にも恵まれない家庭が多く、海外に興味を持つ機会がほとんどありません。だからペルーの紹介をすることで、中学生に海外に少しでも興味を持ってくれたらいいなという思いでこの発表会に臨みました。終了後には質問しに来てくれた中学生もいたので、成果はあったのかなと感じました。また自分自身、大勢の前で発表したり、ダンスをしたりするなどの貴重な経験をする事で成長できたので良かったです。



■大城藤生(豊見城南高校)

①2017年2月9日(木)

②豊見城南高校内

③研修プログラム説明、体験談(スポーツ交流、日系人青年部の方々との交流会 等)

④県の代表だけでなく、学校の代表としても参加したことを改めて実感する事ができました。自分自身が海外で体験した事を同じ学校に通う友人・先生に伝えることは滅多に経験することがないのでとても良い機会にもなりました。

■宮城亜希(沖縄国際大学)

①2016年10月22日(土)

②沖縄国際大学

③多文化共生モデル事業文化講座「沖縄移民ワークショップ」

④沖縄移民の歴史や現状を知ってもらうためのワークショップに参加しました。その中で私が実際に現地へ行って学んだことや驚いたこと、知ってほしいことなどを話し、とても良い経験となりました。この日はウチナンチュ大会が近かったこともあり、沖縄移民について注目してもらう機会として、嬉しく思いました。



■神谷純輝(沖縄大学)

①2016年10月11日(火)

②沖縄大学 スペイン語クラス

③ONCとの合同授業で、最初はワークショップで沖縄で思いつくものは？とみんなに問いかけて黒板に書かせて、沖縄について簡単に述べてもらい、移民について話した。それから上地リリア先生に店員役をしてもらい、より移民者に近い体験をしてもらうため、買い物ゲームをしました。それから、私がペルーで学んだ移民の事、歴史、文化を伝えました。それから、よりペルー文化を伝えるように、おやつタイムでペルーのお菓子を食べてもらった。



④初めは打ち合わせから入って、ペルーで私が体験した事、学習した事をいかに若い世代に伝えるかを考えましたね。

私はペルーに行く前から自分には行って体験するだけでなく、学んだ事を伝えるのが私の役目だと思っていたので、準備、打ち合わせは綿密にしましたね。学校側と専任の先生、ONCの皆さんおかげ成功しました。みんなに私の学びが伝わって嬉しかったです。私がペルーに行って一番の収穫は向こうの人が沖縄の文化を継承する努力をしていた事でした。皆、沖縄愛が強かった。これは私達が一番持っていないといけない心でした。まさか、海外に行ってより沖縄の事を知る事になるとは思いもしませんでした。外に行っとうちの事を知るこれは一般的な旅行とは別の感覚でした。これからもっと沖縄の事を発信していきたいと思います。

■新垣梨依乃(慶應義塾大学)

①2016年10月5日

②慶應義塾大学、スペイン語の授業内

③食文化をメインテーマに、派遣の目的や日程などを30分ほどで紹介しました。

④予想より南米や移民に関心のある学生が多く、興味を示してくれたことが嬉しかったです。

派遣後アンケート

Q1. 滞在中、海外のウチナンチュの歴史や生活、ウチナーネットワークを学ぶことができましたか？

- ◆カニエテ、セロアズルなどの移民発祥の地やステイ先の家族史を聞いたり、現在も頑張っている日系企業を見学して、昔から今までの歴史の流れやこれからの日系・県系グループのビジョンを聞くことができました。それが、自分を振り返ったり、こらからのことを考える力となった。
- ◆滞在中も生活に日本語が混じっていたりしてウチナーの精神が感じられてネットワークも学べました。
- ◆移民の歴史を中心にウチナーとペルーの友好関係について学べた。
- ◆施設を見学したことで、県系人や日系人がどのような歴史の中で生活してきたか、知る事ができた。ホームステイや県人会と交流をしたことで県系人の想いを知ることができた。特にアイデンティティーや沖縄に対する想いなど。
- ◆県人会や工場見学を通して、移民してきた人達の話聞き、歴史を学ぶことができた。また、沖縄の伝統(音楽や仏壇など)を大切にしていることを強く感じた。
- ◆県人会やホームステイを通して、普段の生活だったり、ペルーの人の人柄だったりを感じる事が出来ました。また、県人会の人が沖縄のことを大切に思っていて、すごく感動したし、日本の良さもペルーの良さも気づくことができたと思いました。
- ◆この事業で本当に多くのことを学ばせていただきました。県人会の方々との交流では、実際にペルーで沖縄の文化を守り続けている姿にとっても感動しました。移民の歴史も事前研修ではわからなかったことが実際に行くことで見えることが多くありました。

- ◆滞在中はペルーの文化を知ることができました。生活や食事、言語、風習、すべてにおいて異文化だったので、様々な発見ができ、沖縄と比較することができました。ウチナーネットは素晴らしい。南米ペルーで沖縄の心を持った人が大勢いたことに驚きました。
- ◆ホームステイで現地の生活は学べました。うちなーんちゅの歴史は県人会幹部の仲宗根さんのプレゼンで学べました。
- ◆はい。主に県人会を拠点としての活動でしたが、そこで仲宗根さんのお話や式典、若者との交流を通して、ウチナーネットワークを学ぶだけでなく、自分もその一員になることが出来ました。

Q2. 派遣先ペルーの方々との交流はできましたか？印象に残っている交流は、何ですか？

- ◆110周年式典のために、三線をペルーの方々トリハーサルから本番まで参加したこと、また元県費留学生メンバーがかぎやで風を踊るという事で、先生として少し指導し皆と協力して一つの事をやり遂げる良い思い出となった。青年会の人たちは同じ年代で、生活も忙しいはずなのに、イベント運営やダンスの練習などに熱く力を入れていて、その姿に心を打たれた。安座間ジョンさんのバンド見学なども通じて多くの友達を作ることができた。
- ◆ちょっと日本語を混ぜてできるだけスペイン語でしゃべって交流した。シフォンケーキのホールを買ってくれて、ホームステイファミリーとお茶と一緒に食べたことが印象に残っています。
- ◆ティティカカの会場で自分のホストファミリー以外のファミリーとラテンダンスしたこと

- ◆式典の時に一緒にカチャーシーをしたり、話をして友達を作ることができた。
- ◆スケジュールの都合であまり時間はなかったが、日秘文化会館で日系人の若者と交流したことが印象に残った。3世、4世になるにつれ日本文化を忘れてしまうため、そうならないように若者が自分達から文化に触れようとしていて感動した。
- ◆与那原の集まりに参加した時に、みんな与那原出身ということで、今の与那原や自分たちがどういう活動をしているのかとかをいろいろ聞いたり伝えたりできて、とても楽しく交流できたと思います。
- ◆日系人の10代位の方々との交流はとても楽しかったです。皆で日本の文化を学んだりしながらお友達もできたので、良かったです。また、県人会の方々にはお世話になりっぱなしで、たくさん話をしたり、一緒にダンスしたり、スペイン語を習ったりととても貴重な体験でした。
- ◆印象に残っている交流は、間違いなく110周年記念フェスティバルです。県系人による沖縄の音楽、踊り、またペルー音楽、踊りとのミックスはとても感動しました。最後にみんなで踊ったことは忘れません。
- ◆印象に残っている交流は、日系人の同世代の子たちと交流したことです。(研修5日目)全体的に交流する機会が少ないような感じがしました。現地の方と(日系とか関係なく)交流する機会もあればいいなと思いました。(例えば、日本語を学んでいる学生等)
- ◆印象に残っているのは、ペルーの若者との交流です。ペルーの若者の堂々と手を挙げ、自分の主張をする見習うべき一面や、逆にチームワークがなく、個人プレーが多かったりと文化が違えば気質も違うという発見ができました。

Q3. あなたが期待したことはこのホームステイツアーでどのくらい達成されましたか？

期待したこと:達成感

◆「いつもオープン、知る、伝える、つながる！」:
200/100%

◆人と交流してネットワークを広げる:100/100%

◆ホストファミリーとの時間:80/100%

◆自分から行動を！よりうちなーんちゅになる:
100/100%(100%以上です！)

◆日系人・県系人と関わって「うちなーんちゅ」について学ぶ。一生残る出会いにする100/100%

◆県人会の人との交流、歴史・文化を知る:
100/100%

◆ペルーの文化を学んで与那原(沖縄)を発掘。たくさんの人とつながる:100/100%

◆移民の歴史を学ぶ、現地の日系人の方々は彼ら自身のアイデンティティーをどう思っているのかを知る、ペルーに第2の家族をつくる、歌って踊って国際交流:80/100%

◆移民の歴史を学ぶことなどを通してウチナーンチュを学ぶ:120/100%

Q4. その他感想、要望・意見などありましたら、書いて下さい。

◆スペイン語が0(ゼロ)の状態だったので、ホストや青年会との交流で英語力が試された！

◆マチュピチュに行きたいです。

◆人生で初めて海外に行く人も不安になることがないほど、充実していて今後の自分の海外進出するための後押しにもなりました。

◆事前研修がとても良く、きちんと学習できたおかげで現地での移民の話などが頭に入ってきやすかったです。また、これからやりたいことが見えてきたし、大きな収穫となった研修になった。貴重な体験をありがとうございました。

◆要望:2週間はとても短く感じたし、時間にゆとり

がなかったので、1カ月くらいのプログラムを作っ
てほしいです。

- ◆感想: すごく充実した2週間でした。ホストファミリ
ーや県人会の人たちとのつながりは、一生もの
だと思うので、大切にしたいと思ったし、高校2年
という年で南米に行ける人はなかなかいないと
思うので、とてもいい経験になりました。
- ◆本当に2週間では短い、もっといたいと思えるま
でホストファミリーとも県人会の方々とも仲良くな
れました。たくさん貴重な体験・交流をさせてい
ただいて、もう感謝、感謝です。
- ◆ペルーで県人会の方々与交流できたこと、地球
の裏側のうちなーんちゅと繋がれたこと、派遣メ
ンバーとの出会い等、たくさんの素晴らしい経験
をさせて頂き、この研修に参加できて良かったと
心から思っています。サポートしてくれた大仲さ
んはじめNGOセンターの方々、県国際交流推進
課の方々、両親、メンバー、受け入れてくださっ
たペルー沖縄県人会の皆さまに感謝いたします。
Muchas Gracias!
- ◆大仲さんをはじめとするONCのみなさん、諸見
里さん、石川さん、その他尽力してくれた国際旅
行社さん、玉代勢さん、アルトウーロさん、事前
研修で関わってくれたミュキさん、リカルドさん、
カルロスさん、その他のみなさん、現地で関わっ
てくれた全ての方々など、私の成長を支えてくれ
た方々と、一緒に成長した9人のメンバーへの
感謝の気持ちを胸に世界のウチナーンチュ目指
して、これから走り抜けます。ありがとうございました。

編集後記

“世界中でたくさんのウチナンチュが活躍している。”

このことについて、「知識としてはあるけど、あまり実感がわかないなあ…」という高校生、大学生は意外と多いのではないのでしょうか。そんな方々に知って欲しいのがこの海邦養秀ネットワーク構築事業です。実際に海外の沖縄県人会を訪問し、ホームステイしながら現地のウチナンチュとの絆を深めようというこの事業。参加学生の育成はもちろん、若者同士の交流を通して県人会の活性化にも一役買おうという、一見シンプルでありながら奥深い、出汁たっぷりでアジクーターな沖縄そば的事業なんです。

前身の事業から数えて10回目となる2016年の舞台は、沖縄県人が初めて移住して110周年を迎えたペルー共和国。私は学生達の選考から事前研修、引率まで、すべてにおいて携わらせていただきました。

“地球の反対側にいるウチナンチュに会って交流したい”この気持ちが誰よりも強く、ウチナーネットワークの担い手として大きく成長を遂げると感じた10人の学生を、多数の応募者の中から選考しました。彼らは期待に応え、事前研修の時から積極的に移民の歴史やペルーの文化について学び、多くのことを吸収していきました。

ペルーに着いてからも、県人会青年部との交流、移民ゆかりの地や農漁人経営企業への訪問、日本人移住史料館や日系人学校の視察、民族舞踊・ペルー料理のワークショップ等、県人会が企画した大変有意義なプログラムの数々に、学生らは目をキラキラと黄金のインカコーラのように輝かせながら取り組んでいました。また、彼らは用意されたプログラム以外にも、ホストファミリーの方々に宮古島の舞踊クイチャーを披露したり、ペルーに住む親戚に会いに行ったり、移住110周年記念式典に準備から率先してかかわったりするなど、各々がこの研修をより充実したものにするために自ら考え、実践していました。

今回の研修では、学生達がすべてのプログラムに意欲的に臨んだことで、私が当初考えていた以上に大きな成果が得られたと感じています。彼らの進んで知識を習得しようとする姿勢や、現地の方々とどんどんコミュニケーションを図っていく姿に、私自身、お兄さん、いやお父さんくらい年は離れていますが、学ばせていただきました。

学生達は、研修後、ペルーでの経験を学校で発表したり、10月に行われた第6回世界のウチナンチュ大会に積極的に参加したりと、ウチナーネットワークの発展のため、早速行動を始めています。

彼らには、この事業での経験を糧に、沖縄と世界を股にかけ、次世代のリーダーとしてどんどん活躍してほしいと願っています。その姿をみて、また別の有望な学生がこの事業に応募、参加し、その後活躍するというサイクルが確立されれば、担当者として喜びもひとしおです。

最後になりましたが、この度、将来楽しみなニーセーターとともに、とうに三十路を越えた引率者まで温かく受け入れてくださったペルー沖縄県人会の皆様、ホストファミリーの皆様、本当にありがとうございました。各家庭の皆様が、一人一人をミ・イーホ、ミ・イーハ(私の息子、娘)と呼び本当の家族のように接してくれたこと、心から感謝しています。

私も少しはスペイン語を話せるようになって、いつの日かニエト(孫)の顔を見せに再訪できることを願っています。では、その時まで。

iMuchas gracias por todo.Nos vemos!

文化観光スポーツ部交流推進課 玉代勢 興順

人材育成を推進しながら沖縄と世界を繋げる県の事業「海邦養秀ネットワーク構築事業」。2007年にスタートし、10回目を迎えました。2016年は沖縄の反対側にあるペルーに行くことが決定しました。ペルーと言えば、有名な観光地のマチュ・ピチュとナスカの地上絵しか頭に浮かばないかもしれませんが、しかし、実は沖縄と強い関係があります。そこに、約7万人以上の日系人が住んでおり、その8割は沖縄県系人で、誇りを持ってペルー社会で活躍しています。

今年度の事業では沖縄の代表として10人の素晴らしい若者が参加し、県系人の家庭でホームステイをしながら移住の歴史を学び、日系社会の状況を直接見たり、友達を作ったりしました。その中で、大きなイベントが開催されました。それは、沖縄県人ペルー110周年記念式典でした。

110年前、夢と希望を抱きながら、より良い将来を見つけるため、ウチナーンチュ達はペルーへ渡りました。ペルーでの生活は大変だったのですが、ウチナーンチュ達は諦めずに一生懸命に働いたので、今日に至りました。本事業のメンバー達は、その式典に参加することによって、在ペルー沖縄県系社会への理解を深めるだけでなく、ペルー・県系ペルー人との絆を更に強くしたと思います。

本事業では、2013年度のペルーでのプログラムに続き、引率者として2回目の参加をさせていただきました。3年前の経験を生かし、自分の立場から3年前よりよいプログラムを提供できるように頑張りました。プログラムの実施中に予想外のハプニングも起きたのですが、参加者に私の出身国の文化や観光地などを見せる事が出来てとても嬉しかったです。振り返ってみると、2週間という短い時間でしたが、参加者は様々な新しい・貴重な経験ができました。そして、世界の視野が広がり、その時までなかった新しい可能性が見えたのではないかと思います。

日本に帰って1か月後、報告会が行われました。参加者はペルーで体験したことを発表しながら、本プログラムを振り返りました。そして、最後に、一人ひとり、これからの行動を宣言しました。皆さんが気持ちを込めて、ペルーとの繋がりを強化しよう・ペルーで作った絆を深めようと宣言しました。私は参加者のスピーチを聞いて、感動しながら、沖縄、そしてウチナーネットワークの将来が期待できると感じました。

最後になりますが、ペルー沖縄県人会、ホストファミリー、国際旅行社及び沖縄NGOセンターの皆様には、感謝の気持ちでいっぱいです。一人一人の協力のおかげで、2016年の事業は無事に終わり、目標は達成できたと思います。そして、個人的に、私を信用していただいた沖縄県庁の皆様にも心から感謝しております。この事業で得たものを次の目標に繋げようと思います。これからも、ペルーと沖縄の絆をより深めるために、頑張りたいと思っております。

文化観光スポーツ部交流推進課 当山樋口アルトゥーロ

海邦養秀ネットワーク構築事業を通して

「ペルーについて学ぶだけでなく、沖縄に住んでいるペルー人や多国籍の人に触れる事で、沖縄で活躍する想いを受け取ってもらいたい。」

その思いをペルーに持って行ってほしいと事前研修を行いました。

事前研修から本研修まで、沖縄県の方、沖縄ペルー協会の方、ご父母の皆さまに温かく見送っていただき感謝いたします。

往路のアトランタ空港では入国審査混雑により乗り継ぎができず、アトランタで1泊するとなりましたが、学生達もそこから学ぶ姿勢が見受けられ、良い経験として楽しんで進めることができました。

また、県人会の皆さまもスケジュールを調整していただき、リマ空港に到着したとき、深夜にもかかわらず、笑顔で迎えてくれるホスピタリティがうれしかったです。

ホームステイ先では学生達がバラバラに泊まるので、安全の面では気を使いましたが、ネット環境が整っており、ネットを利用した連絡網でそれぞれの安全確認、体調管理も行うことができました。

旅行中、大きな事故もなく、参加者の皆さんが学び、交流をすることができたことが何よりの成果です。

ペルー研修でのハイライト ペルー移民110周年記念式典では沖縄から遠く離れた地での大きなうちなーんちゅの誇りを感じました。

その中でもペルー県人会青年部のみなさんのエイサーが圧巻でした。また、三線や沖縄の歌を披露していただき、伝統を守り、つなげていくペルーの皆さまの沖縄への想いは予想以上でした。

うれしい反面、うちなーんちゅとしてのアイデンティティをもっと持ちたいという学生達の声も聞こえてきました。

ホームステイ先には日本語でのコミュニケーションが取れない受入ファミリーもある中で、皆がコミュニケーションを率先して行っている姿が見えました。

また、日本の文化を学ぶ現地のプログラムに自主的に参加し、学生たちが交流を盛り上げる場面もありました。

お別れの空港では涙もあり、ホストファミリーとの交流が思い出深い物になったと感じております。

リマからの帰路でも14日間の思い出話が止まりませんでした。

現地でのつながりは帰ってきてからも続き、ペルーで交流したペルー人が研修生として那覇空港に来たときは学生達が声を掛け合ってお迎えにも行く場面もあり、ペルーと沖縄の架け橋を感じました。

今後もこの架け橋が大きなものとなるように祈っております。

株式会社 国際旅行社 石川 実奈美/諸見里 一寿

NPO法人 沖縄NGOセンター 大仲 るみ子



はるばると
ヘルトの土

乗り越えて
紙を打ち込む
深沢 ひろの

Finalmente llegué
cruzando el infinito mar.
Mi incansable lampa
labró
esta querida tierra.

Hirano Fukazawa